Ⅲ－４　［コラム］黄金の大刀の発掘とその後

新納 泉

１．黄金の大刀との出会い

湯舟坂２号墳から黄金の大刀が発見されたのは 1981 年（昭和 56）。そのとき私は京都大学大学院博士課程の２年生で、いまから 40 年以上も前の、遠い昔のことだ。「久美浜というところで、完全な形の双竜環頭大刀がみつかったらしい」という話を聞いて、ひと目見たいと、すぐさま駆けつけた。自分の研究のテーマは装飾付大刀で、ちょうど各種の大刀の年代的並行関係を追求していたところだったので、環頭と、鞘の表と裏の装飾という、３つの要素の組み合わせを知ることのできる絶好の資料だと思ったのである。

現地では、京都府教育委員会の奥村清一郎さんを中心に、発掘がかなり進んでおり（写真１）、双竜環頭大刀はすでに宿舎に運び込まれていた。畳が敷きつめられた広い部屋に、出土した須恵器などとともに置かれているさまは、壮観という感じがした。その後、私は発掘現場で実測などのお手伝いをすることになる。もう冬が近く、この地域特有の２、３時間ごとの時雨に襲われながらの作業だった。調査が終わって、出土資料は京都府庁に移され、私は大刀の土などを落とし、破片を接合して実測図をつくるという地道な作業をコツコツと続けた。

２．湯舟坂２号墳大刀の特徴

宿舎では双竜環頭は、シャーレに入れてガーゼの上に置かれていた（写真２）。環頭の部分は錆も少なく泥もあまり付着していなかったが、三日月状の透かし彫りのある筒金や責金具はかなり破損していた。

そのころ双竜環頭は数十例が知られていたが、全体がわかるのは数例にすぎなかった。私がいちばん知りたかったのは、環の周囲の文様の細部だった。ちょうどこの年の５月に韓国を旅行し、多くの方々のご配慮で百済武寧王陵から出土した単竜環頭の環周の文様を細かく観察する機会を得ていた。環の部分には２匹の竜が絡み合う文様が施されており、日本で出土する単竜環頭は、その文様が崩れていく過程を示してい

写真１　発掘調査風景

写真２　掘り上げ直後の双竜環頭

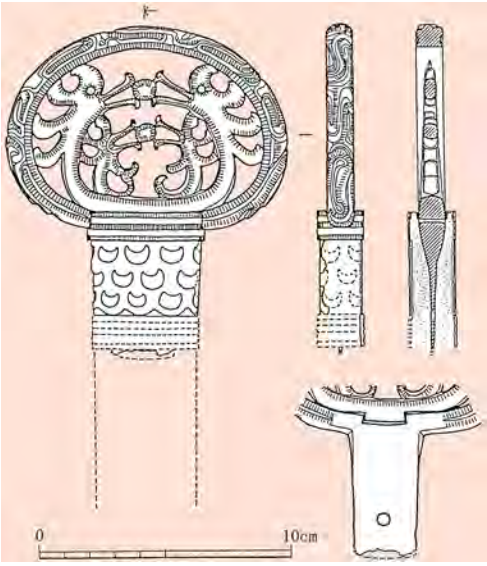

図１　双竜環頭実測図（S=1/3）

た。湯舟坂の資料もその過程に位置づけられるのではないかと期待したが、残念ながら脚部の表現が崩れてやや機械的に配されているものであることがわかった。それでも、双竜環頭の流れのなかでの位置づけや、単竜環頭との年代的な関係がわかって、たいへん興味深かった。

湯舟坂２号墳の双竜環頭は、２対の竜を表現した部分と、周囲の環とが別々につくられ、あとではめ込む方式になっている（図１）。おそらく内部の竜の部分は合わせ型でつくられ、環の部分は失蠟法でつくられたのだろう。失蠟法というのは、蠟（蜜蠟）で立体的な形をつくり、それを粘土で包んで乾かし、その後熱を加えて蠟を溶かしてできた空洞に金属を流し込むという方法だ。この技法は、まもなく廃れ、竜の文様は金属板で透かし彫りのようになり、やがて形骸化して唐草模様のような表現に近づくことになる。湯舟坂２号墳の双竜環頭は、そういう流れのなかで、ひとつの頂点ともいえる華やかなものだ。

鞘の構造にも、過渡期の特徴があらわれていて興味深い。鞘の先端には、蟹目釘と呼ばれる二本の鋲が打たれているが、これは古手の大刀に多い特徴だ。中国では儀式の際に、皇帝の前に並んだ人々が、自分の前に杖のように刀を立てて、柄頭の上に両手を置いて威儀をただす。そのときに、鞘の先が地面に触れるので、その部分を守るためにこのように鋲が打たれていたのだろう。刀を身に着けていた人の身長に応じて、おのずから適当な長さが決まってくるので、長ければ立派であるというようなものではなかった。また、刀は鞘口の裏に設けられた装置によって佩用され、垂直に近い形となる。

ところが、湯舟坂２号墳の大刀には、鞘に２箇所の佩用金具がつけられ、それぞれに紐を通してベルトから吊り下げられるようになっており、水平に近い佩用となる。こうした新しい佩用金具が蟹目釘と共存しているところが、外来の大刀を受け入れながら新しい列島的な大刀を量産していこうという変革期の特徴をよくあらわしているのだろう。

柄頭に接した筒金には、三日月状の透かしが施されている。これは、もとをたどれば竜の鱗を表現していたものだ。また、鞘の裏側には不規則な波線の列点文がみられるが、これも竜の表現が崩れ果てたものということができるだろう。文様の退化もまた特徴のひとつである。

３．いつの時代のものなのか

こうした大刀の年代は、おおまかに語られることはあったが、もう少し厳密な手続きに従って年代を絞り込みたいと思っていた。環周の竜文の退化は大きな手がかりとなった。先に触れた百済武寧王陵出土単竜環頭（図２：単竜・単鳳Ⅰ）は、武寧王の没年が 523 年であるので、一つの定点となる。鞘の構造や古墳での共伴関係から、三種の大刀の年代的対応関係を推定したのだが、新しい段階の資料の年代的定点がわからなかった。

そんなとき、兵庫県養父市八鹿町箕谷２号墳から「戊辰年」の銘をもつ刀が出土した。干支は 60 年で一巡するのだが、この場合は推古朝期の 608 年である可能性が最も大きい。問題は、この刀が図２のどの段階に相当するのかをつきとめることだった。戊辰年刀は残念ながら装具がほとんど残されていない。限られた手がかりは、湯舟坂２号墳の大刀にもあるような佩用金具だった。紐を通す環の位置が、この２つではかなり違っている。佩用金具の裏側に寄ってつけられているものから真上につくものへと変化していくと考えると、戊辰年刀は図２の 10 段階に相当すると推定された。１段階を 520 年頃に、10 段階を 610 年頃と考え、ひとつの段階に 10 年を割り振ると、湯舟坂の双竜環頭大刀は６段階から７段階にかけてのものと思われるので、570 年から 580 年頃の製作と考えられる。欽明朝やそれに続く時代に、この地域を舞台に活躍した被葬者が、このような華やかな大刀を入手していたのであろう。ちなみに、それ以降の研究で戊辰年を 668 年とする見解も唱えられている。新しい世代の研究者の方々からご意見をお聞かせいただければと思っている。

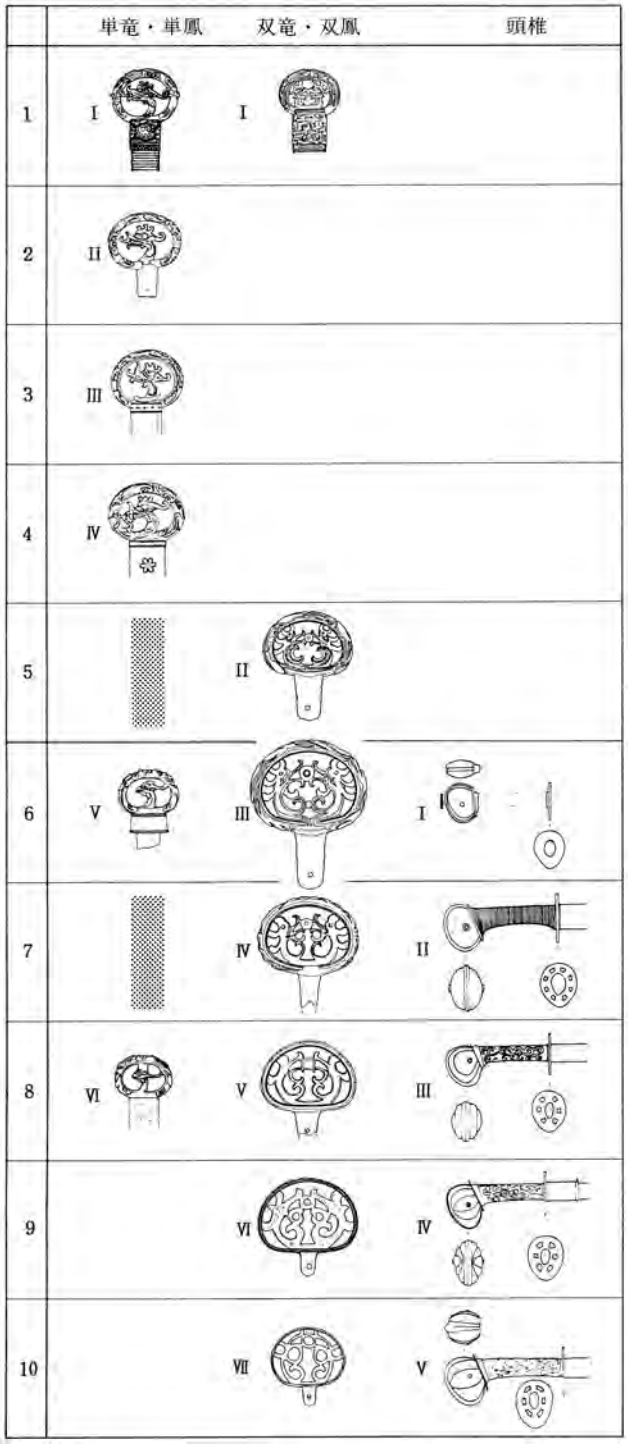

図２　三種の大刀の型式学的並行関係

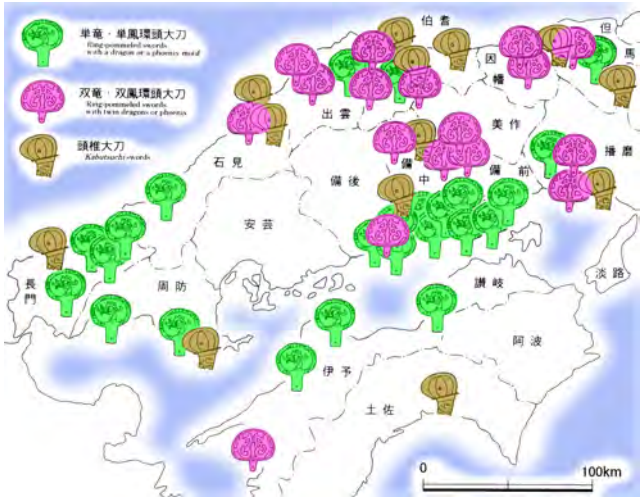

図３　中国・四国地方における三種の大刀の分布

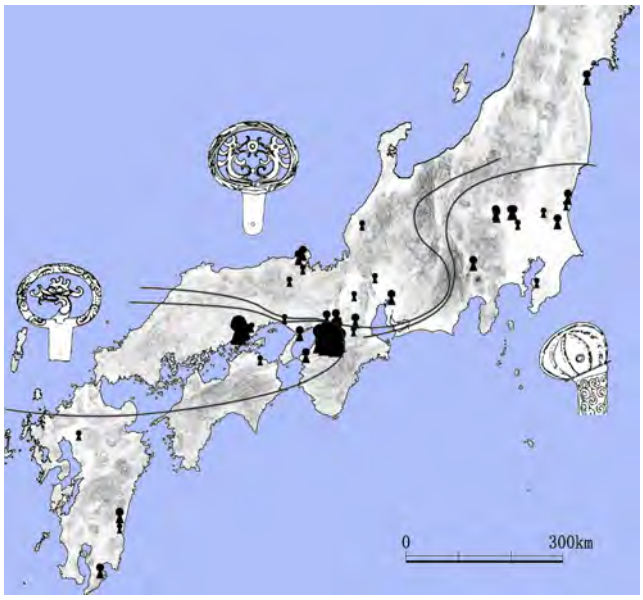

図４　三種の大刀の分布と地域ブロック

４．なぜここに黄金の大刀が

黄金の大刀が発見された頃、同志社大学におられた森浩一さんが、これこそ「日本海文化」を表すものだと言われていた。私は、双竜環頭は東海や関東からも出土しているので、なんとなく首をかしげていた。そんなことを気にしながら、研究の拠点が岡山に移ったので、中国・四国地方について考えてみようと思い、分布図を作成してみた（図３）。その結果、単竜・単鳳環頭大刀は瀬戸内地域に多く、双竜環頭大刀は中国地方の後の「出雲街道」から北に集中し、頭椎大刀は明瞭な集中をみせないということがわかり少し驚いた。

同じように全国を見てみると、単竜・単鳳環頭大刀は瀬戸内地域以外では分散的で、双竜・双鳳環頭大刀は日本海側から東海地方にかけて、頭椎大刀は東国が中心であることがわかった（図４）。もちろん、当時の社会は領域支配ではなく人と人とのつながりが中心なので、地域が一色に染まることはない。また、この３つのブロックは、それぞれ大伴氏や、蘇我氏、物部氏などと強い結びつきをもっていそうだ。６世紀後半を中心に、こうした勢力が地域ブロックを背景に互いに競い合っていたことを、大刀の分布は示しているように思う。湯舟坂２号墳の被葬者は、日本海・東海ブロックのなかで、蘇我氏とも強い結びつきをもちながら、大きな役割を果たしていたのだろう。

図版出典

図１：奥村清一郎（編）1983『湯舟坂２号墳』（京都府久美浜町文化財調査報告 第７集）　久美浜町教育委員会、第 18 図をもとに新納作成

図２：新納泉 1987「戊辰年銘大刀と装飾付大刀の編年」『考古学研究』第 34 巻第３号　考古学研究会

図３：新納泉 1992「巨大墳から巨石墳へ」『新版 古代の日本』４　角川書店（一部改変）

図４：新納泉 2002「古墳時代の社会統合」『日本の時代史』第２巻　吉川弘文館（一部改変）

編集後記

2020 年に始まる「湯舟坂プロジェクト」は早くも 6 年目に突入している。教員生活のほとんどを久美浜に捧げてきたといえば大げさだが、府大に着任したのが 2018 年なので、私だけでなくたくさんの教え子がそれまで縁もゆかりもなかった久美浜に足繁く通ったことは確かである。3 回分の成果報告会資料集をまとめて一書にしようと、気軽な気持ちで本書の制作を思い至ったが、皆さんお忙しく、思いのほか難産だった。スケジュールに追われる中、献身的に編集作業を手伝ってくれた二人の大学院生には感謝してもしきれない。

なお、湯舟坂プロジェクト立ち上げ時から一緒に仕事をしてきた、菱田哲郎先生が今年度でご退職される。まだ隣の研究室には山積みの荷物があるので実感がわかないが、1994 年に開設した府大考古にとって最大の岐路であり、寂しい限りである。様々な仕事を通じて文化遺産の地域資源化の重要性を教えていただいた学恩に感謝するとともに、兵庫県と接する久美浜にこれからも足繁くお越しいただければと思う。（い）

表紙写真

上左　双龍環頭大刀調査風景（諫早直人撮影）

上中　第 2 回 ACTR 成果報告会風景（栗山雅夫撮影）

上右　「つなプロ」風景（諫早直人撮影）

下　湯舟坂 2 号墳出土双龍環頭大刀（栗山雅夫撮影）

裏表紙写真　湯舟坂 2 号墳全景（南西から。栗山雅夫撮影）

京都府立大学文化遺産叢書　第 33 集

地域資源としての湯舟坂 2 号墳

編　集　諫早 直人（京都府立大学文学部准教授）
発　行　京都府立大学文学部歴史学科
〒 606-8522　京都市左京区下鴨半木町 1-5
https://kpu-his.jp/
発 行 日　2025 年 3 月 6 日
印　　刷　北斗プリント
〒 606-8540　京都市左京区下鴨高木町 38-2